様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　21　年　4　月　27　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５２０４９４
研究課題名（和文）　鎌倉幕府の権門寺院政策について

研究課題名（英文）　On the policy of the Kamakura Shogunate for the influential temples

研究代表者
平　雅行　（TAIRA MASAYUKI）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：１０１７１３９９

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：鎌倉幕府、延暦寺、園城寺、東寺、将軍護持僧、元寇、顕密体制、鶴岡八幡宮

１．研究計画の概要

鎌倉幕府の宗教政策研究は、(1)鎌倉幕府が東国社会で展開した顕密寺社政策、(2)鎌倉幕府が延暦寺･東寺･東大寺など畿内近国の権門寺院に対してとった政策、(3)鎌倉幕府による禅律保護政策と顕密寺社政策との連関、以上３点を解明することから成る。

本研究は、鎌倉幕府による僧侶の人的編成や朝廷補任権への介入を網羅的に検出しながら、(1)(2)の課題を解明し(3)の課題への展望を得ることをめざす。

その際、留意すべきは幕府の政策の時期的な変化である。これまでの研究によって私は、鎌倉幕府の東国寺社政策が、時期と宗派によって変化のあったことを確認した。そこで本研究では、下記の事実を具体的に解明することによって、幕府の宗教政策の時期的特徴と、その歴史的変化を実証的に明らかにしたい。

①寺門･山門･東密･興福寺系それぞれについて、鎌倉幕府と人的関係をとり結んだ僧侶の具体的事蹟、特に彼らが西国で行った活動を網羅的に検出する。
②寺門･山門･東密･興福寺系それぞれについて、鎌倉幕府が関与した寺社紛争や、幕府が介入した権門寺院の長官人事の事例を網羅的に検出する。
③以上を踏まえて、鎌倉幕府による禅律保護政策と顕密寺社政策との時期的偏差を明らかにする。

この基礎的な作業を積み重ねることによって、顕密体制における鎌倉幕府の位置や、顕密体制と東国仏教界との構造的連関を明らかにしたい。

２．研究の進捗状況

これまで寺門・東密を中心に検討を進め、下記のような成果をあげることができた。

(1) 論文「鎌倉幕府の将軍祈祷に関する一史料」では元亨 3 年将軍守邦の祈祷結番帳を紹介し、そこに登場する 24 名の僧侶の事蹟を検討して次の事実を明らかにした。

①この史料は鶴岡八幡宮別当頼仲が 1336～1341 年の間に作成した。一部誤りもあるが全体としてその史料的信憑性は高い。
②24 名の宗派別の内訳は、東密 11 名、寺門 11 名、山門 1 名、不明が 1 名である。この結番衆は将軍護持僧とは別である。
③結番衆の一人である禅秀は北条氏出身であり、鎌倉末に東寺長者となったが、幕府崩壊後は禅僧(碧潭周皎)となり京都西芳寺開山として禅密兼修の立場を貫いた。
④この文書作成を依頼した房玄は三浦氏の出身。将軍祈祷に従事していたが、幕府崩壊前に後醍醐方となり、その後も転身が遅れたため、室町幕府下では不遇であった。

(2)論文「親鸞の配流と奏状」では、親鸞流罪の背景として鎌倉幕府や朝廷の流人制度と囚人預け置き慣行について検討した。

(3)論文「鎌倉期随心院の史料紹介」では新出史料を紹介し、次の事実を明らかにした。

①随心院厳恵と静厳への継承にかかわる『野沢血脈集』の記事は信憑性が高くない。

②厳海の弟子である随心院成宣も、一時鎌倉に赴いていた。

(4)論文「鎌倉寺門派の成立と展開」では、鎌倉で活動した主な園城寺出身僧106名の事蹟を紹介し、次の事実を明らかにした。

①源氏将軍時代は寺門重視政策がとられたが、重要な法会では京都から高僧を招聘しており、幕府僧の質は高くなかった。

②鶴岡別当公暁(寺門)による将軍実朝暗殺を契機に幕府は寺門重視政策を転換した。

③将軍護持僧の円親と将軍祈祷に従事した円意とは、別人ではなく同一人物である。

④将軍頼経との権力闘争の過程で、北条時頼は隆弁(寺門)を深く信頼した。幕府の寺院政策もその影響をうけて、極端な寺門贔屓政策をとるようになった。ただし密教祈祷は寺門も含め低調となった。

⑤モンゴル襲来を契機に幕府は密教振興を図り、鎌倉の顕密仏教は最盛期を迎えた。幕府僧はさらに園城寺・延暦寺・東寺・東大寺など畿内権門寺院へと進出した。

⑥鎌倉末期、実相院増基が鎌倉寺門派の中心となり、大法の尊星王法を修した。幕府が崩壊して室町幕府が成立すると、増基たち寺門系幕府僧は室町幕府の武家護持僧に転身した。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

鎌倉山門派と鎌倉寺門派の人的な検討を終え、鎌倉真言派の史料収集も進んでいる。鎌倉幕府の宗教政策を四期に区分しうること、それぞれの画期の要因も判明しており、全体的な見通しもついてきた。

ただし平成 19 年春より大正大学附属図書館における東寺宝菩提院三密蔵聖教マイクロフィルムの閲覧が全面停止され、史料調査やその活用ができない状態が続いている。そのため当面、鎌倉末における鎌倉真言派の動向について具体的に執筆することは断念せざるを得ない。

４．今後の研究の推進方策

鎌倉真言派の僧侶数が膨大であり、その事蹟紹介だけで400～500枚ほど(400字詰め原稿用紙換算)を要する見込みである。そのため、年度内にすべての検討結果を活字化するのは困難である。しかも、東寺宝菩提院聖教の閲覧停止、利用停止という悪条件も重なっている。

しかしすでに宝菩提院聖教の主要部分の調査を終えているため、総合的な考察を加えることに支障はない。本年度は、鎌倉真言派および興福寺系の検討を進め、以下の総合的検討を行いたい。

①寺門･山門･真言･興福寺系幕府僧の活動について、時期的宗派的な偏差を解明する。

②鎌倉幕府の権門寺院政策の基本姿勢と時期的宗派的な変化の有無を解明する。

③鎌倉幕府の禅律保護政策と、権門寺院政策との相関関係を総合的に考察する。

④寺院間相論や寺院内相論に対する、朝廷と幕府との役割分担の変化を解明する。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）

① 平雅行、「鎌倉寺門派の成立と展開」、『大阪大学大学院文学研究科紀要』49 巻、111-206 頁、2009 年、査読無

② 平雅行、「親鸞の配流と奏状」、『親鸞門流の世界』(法蔵館)、175-208 頁、2008 年、査読無

③ 平雅行、「鎌倉幕府の将軍祈祷に関する一史料」、『大阪大学大学院文学研究科紀要』47 巻、1-41 頁、2007 年、査読無

〔学会発表〕（計　２　件）

〔図書〕（計　２　件）

〔その他〕

① 平雅行、「神国日本と仏国日本」、『世界史を書き直す　日本史を書き直す』(和泉書院)、113-146 頁、2008 年

② 平雅行、「中世史像の変化と鎌倉仏教」、『じっきょう　一地歴・公民科資料』65 号・66 号、2007～2008 年